

光悦寺垣の制作について

造園緑化コース 重原 勇斗

(指導教員：新井 俊宏)

1. はじめに

アカデミーに入学して、3種類の竹垣を制作した。今まで作り上げたものとは、明らかに形が違う光悦寺垣を培った技術を生かして作り上げたいと考えた。私は、京都を訪れ、光悦寺で本物の光悦寺垣を見て感じた体験をもとに、日本の伝統的な美しさを自分なりに形にすることを目的として制作した。

2. 光悦寺垣について

臥牛垣の別称もある竹垣で京都洛北鷹ヶ峰の光悦寺に本歌がある。露地とほかの境内とを仕切るために、特に長く曲線を見せて作られているのが、特長である。約18mという雄大な規模の透かし垣で、伝承では光悦の創意であるといわれているが、正確なことは不明。矢来垣に太い玉縁をかけた形式で玉縁が地面に至って終わるところに特色がある（写真－1）。



写真－1 光悦寺垣本歌

3. 制作の方法

次に光悦寺垣の制作を行った。第1回制作では、材料や道具の確認を行い、下準備をした後、玉縁の接続部分や下地部分、組子までを制作し作業の難しさが残り、課題が残った（写真－2）。第2回制作では、（株）竹籐商店を訪問するなど竹に関する知識を深め、再び実践し、完成へと近づけた（写真－3）。

また、制作とあわせて安全面にも注意を払った。刃物使用時の安全、竹割作業時の注意点、作業中の整理・整頓を行い、安全に作業を進めた。

今回の卒業制作では、日本の伝統的な竹垣技法の理解と実践を深めることを目的として取り組んだ。制作にあたっては、竹の種類や長さを選定し、割竹の方法や組み立ての順序を計画した。竹は自然素材であるため、割り方や乾燥具合によって強度や見た目が大きく変わることがあり、制作前に慎重な観察と準備が必要であった。割竹を作る際には、竹が割れることを防ぐため、乾燥させないようにしたり、割る角度を工夫したりすることで、完成後の竹垣の美しさと耐久性を高めるよう工夫した。



写真-2 第一回試作最終形



写真-3 竹の割き方を教えてもらう

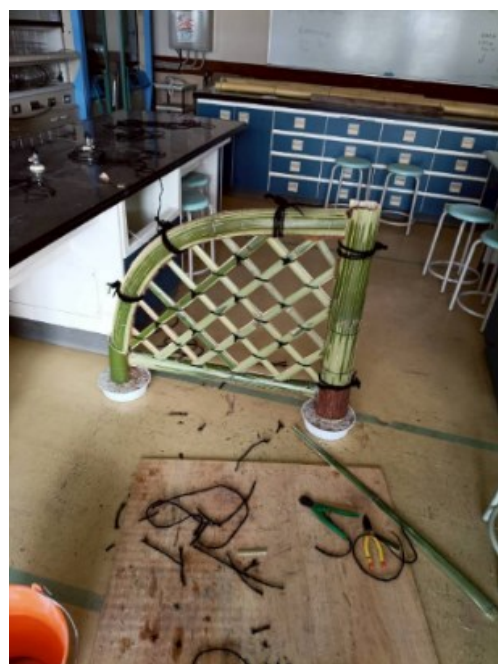


写真-4 完成した光悦寺垣

一方で困難な課題にも直面した。竹は割れやすく、思い通りの形に加工するのが難しいことがあり、予想以上に手間がかかった。また、竹の太さや曲がり方の違いによって竹垣の安定性や見た目に差が出るため、材料の選定や配置の工夫が非常に重要であることを実感した。これらの課題に対しては、竹をたくさん割り、感覚を覚える方法を制作の過程で試行錯誤を重ねた。この経験により、伝統技法の単なる模倣ではなく、材料の性質や構造を理解したうえでの工夫が重要であることを学ぶことができた。

今回の制作を通して、光悦寺垣の構造や技法だけでなく、制作計画の立て方や問題解決の方法についても理解を深めることができた。完成度の面では、計画通りの形や美しさを実現で、竹割りの技術につ

いては課題として残った。将来的には、より正確な竹割り技術を磨くことで、さらに完成度の高い光悦寺垣を制作できると考えられる。また、今回得た経験や技術は、他の庭園制作や伝統工芸の制作にも応用可能であり、今後の学びや作品制作に大きく役立つと感じている。光悦寺垣の美しさや技法の奥深さを実際に体験することができた今回の卒業制作は、単なる作品制作にとどまらず、今後の制作活動に対しての貴重な経験となった(写真-4)。